ISSN 0910－2396

野鳥だより

—北海道—

第 78 号

編集・発行　北海道野鳥愛護会

発行年月日　平成元年12月21日

オオマシコ　1. 2. 24.　撮影者　小 堀 煌 治

私の探鳥地 ⑬

茨戸（湖）川周辺

泉　勝統

茨戸川（旧石狩川）の河川敷に僅かにへばりつく叢林。その林床にまだ残雪も残る頃、ひっそりと潜んでいたカシラダカ。それも北へ帰り４月ともなると川畔の狭い草地にオオジュリンがやって来て、あっという間に夏羽に衣がえ。ノビタキは枯れススキにすがりついている。空高くヒバリも囀り、すっかり春めいてくる。私は87年より、ここの堤防を健康保持のため探鳥散策することを日課のようにしている。

茨戸園附近はカラ類・ケラ類の姿が見られ、茨戸川沿に入ると河川敷の叢林や草地に、季節により色々な鳥達が渡って来て、個体数は少ないが結構楽しませてくれる。

初夏が近ずくと、カワラヒワ、アオジ、キジ、ベニマシコ、オオ・コヨシキリが、やゝ遅れてホオアカ♂の共同採餌も見られる。今年はオオジシギのつがいが恋仇を追って樹間に営巣した。カッコウやコムクドリは繁殖前、特に姦（かし）ましい。水辺を見るとマガモ、コガモ、カルガモ位しか残っていないが、エクリプスからの換羽が見られ、これもまた楽しみの１つだ。３～４月にはヨシガモ、ハシビロガモ、オカヨシガモのつがいが次々とやって来て１～４週ほど居座っていった。４月下旬の頃、上流からアカエリカイツブリ(3)が夏羽姿でくだって来たのには驚いた。

ここの草地は、僅かな堤防斜面のみだから抱卵期の野鳥の巣近くは勿論、鳥の「逃走距離」まで近ずかぬよう、できるだけ遠い低地から行動観察することにしている。

春秋の渡りの季節は、めまぐるしい程鳥が出入りする。草原の鳥に森の鳥も混じり、エゾセン、ウグイス、ホホジロ、メボソ・センダイムシクイ、カケス、シロハラ、ツグミなどなど……。勿論「俗化指標鳥」などと有難くない呼び方をされているムクドリ、ヒヨドリがキジバト、ハクセキレイなどと共に、川畔をにぎやかにしてくれる。今夏はカワセミも迷いこんできた。

初秋から春にかけて、草苅場にニュウナイスズメの大群。ヒレンジャクの混ったキレンジャク、マヒワ、ベニヒワの群など……茨戸周辺もまんざらではないと再確認した。ここは水鳥が渡りの休憩地でもあるのか、マガモ、コガモの大群の中に、キンクロハジロ、ミコアイサ、カワアイサ、ヒドリガモ、オナガガモも、ホシハジロ、カイツブリ、ミミカイツブリなどもやってくる。

秋は、チカを追ってかユリカモメやアジサシも飛来するし、新春にはワカサギを追ってウミアイサ、ホホジロガモも相当上流まで溯（そ）上する。昨年はオオホシハジロが越冬し４ケ月間観察できた。トモエガモ(♂)の姿も見たし、ウミウものぼってくる。アオサギ、オオ・コハクチョウも飛来する。

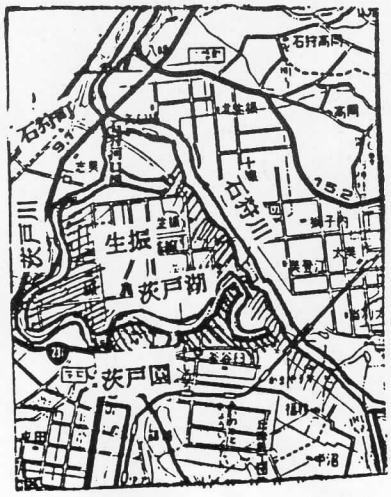
87年９月から５ケ年計画で、茨戸園入口から老振側を北方向に「定点観察法もどき」にH_1～H_8を設定、夏季でも週２～３回は観察チェックしている。

だが昨今、北岸の築堤架橋工事、南岸も放水路改修などで水鳥が岸に近づかず、いささか気落しているといったところだ。

猛禽（きん）類も鳥を追ってやってくる。オオタカ、ノスリ、チュウヒの他、冬はオジロワシ、オオワシがカモ類を狙ってジーッと待ちつづける姿をしばしば見る。

紙数に限りがあるので、茨戸湖（教育大前～石狩川畔）で観察した主たるものをあげておく。……イソシギ、ハマシギ、コチドリ。今年は偶然、タヒバリ、トウネン、ダイゼン、エリマキシギ、そしてコオノトリを……。クロテン、ミンク、キタキツネも姿を見せてくれる。

探鳥散歩は楽しい。歩くことは一向苦にならない。それは〝鳥達が散歩を楽しいもの〟にさせてくれるからだ。



※ 斜線部分が探鳥地

〒002　札幌市北区篠路２条３丁目

北海道に舞い降りた迷鳥たち (3)

山田 良造

北海道で記録された迷鳥たちを調べていると、地域で熱心に野鳥観察している方々から、迷鳥など稀少鳥類の情報・資料（写真など）の協力があり、多くの日本鳥学会未公認記録の迷鳥たちがいることがわかった。北海道のこの鳥たちの記録を掘り起し、貴重な資料として後世に残し、「この鳥たちを守る」心の広がりを念願して、この記事を続けることにした。

今回は浜中町片岡義廣氏、釧路市橋本正雄氏、室蘭市本多進氏、岩見沢市佐藤幸典氏の記録を紹介します。（鳥名番号は前号から続く）

8．キガシラセキレイ（セキレイ科）

1987年5月8日午前9時頃、厚岸郡浜中町暮帰別で、霧多布民宿「えとぴりか村」村長片岡義廣氏は、海岸に近い湿地で、仲間からはぐれたと思われる1羽のキセキレイに似た鳥を観察した。この鳥が北海道で初記録のキガシラセキレイ♂夏羽とわかり、十分観察して写真撮影した。キガシラセキレイはこの湿地周辺で2日ぐらい餌をとって過ごし、飛び立っていった。

キガシラセキレイ　1987・5・8　浜中町暮帰別　片岡 義廣　撮影

キガシラセキレイは全長約16.5cm、♂は頭から下面にかけて黄色。背は灰色。首の後方には黒斑があり、翼、尾は黒色っぽい。三列風切と雨おおいに白色の羽縁があり、2本の白線になって見える。くちばし、足は黒色。

ユーラシア大陸中央部で繁殖し、インド・中国南部・インドシナ半島などで越冬する。

日本にはごくまれな旅鳥として渡来し、1970年と1972年長崎県男女群島、1972年兵庫県姫路、1975年秋田県男鹿半島、1979年新潟県粟島、1980年長崎県対島などで記録がある。

北海道ではこの記録が初記録。

クロヅル　1986・1・25　鶴居村下雪裡　山田 良造　撮影

9．クロヅル（ツル科）

釧路市市立博物館橋本正雄氏の記録によると、1985年12月5日タンチョウ一斉調査のとき、十勝でタンチョウと行動していたクロヅル1羽が確認されており、同じ個体か確認できないが、その後12月14日・鶴居村下雪裡タンチョウ給餌場に飛来したタンチョウの群れに、クロヅル1羽仲間入りしていた。このクロヅルは翌年の1986年3月27日まで、タンチョウと一緒に鶴居村下雪裡の給餌場で越冬した。

この頃1986年３月中旬、音別町中音別の音別川で、釧路市興津２丁目大谷木茂氏が、タンチョウと一緒にいたクロヅルを写真撮影しており、鶴居村と音別町とは距離があり、同じ個体か不明であった。

クロヅルは全長約114cm、体は灰色。頭や首は黒色で、目の後から首にかけて太くて長い白色の帯がある。頭上は赤色。くちばしは灰緑色で、足は黒色。

スカンジナビア半島南部、中央アジアからシベリヤ中部など、ユーラシア大陸中部で繁殖し、ヨーロッパ南部、アフリカ東北部、ベトナム、インド、朝鮮半島、日本などで越冬する。日本では少数冬鳥として渡来し、鹿児島県出水平野には定期的に見られる。

北海道では1966年頃、千歳市馬追沼で羽を痛めて発見され、札幌市南区藤野小沢広記方で２年６カ月保護、1970年12月阿寒町、1971年10月20日釧路市美濃、1971年12月11日鶴居村下雪裡、1980年12月～1981年３月網走市のほか、前記釧路の記録がある。

10. ヤマショウビン（カワセミ科）

1986年５月10日午前７時頃、室蘭市日の出町今幸和方前で、カラスに追われて飛べなくなっていたヤマショウビンが保護された。日本野鳥の会室蘭支部長本田進氏等は、この鳥が衰弱していたことから、チカ等の餌を与えたところ元気になり、その日のうちに、登別市幌別川川上ダムに放鳥した。

ヤマショウビンは全長約28cm。頭は黒色。背、翼、尾などの上面は鮮やかな青紺色。首から胸は白色で、腹は赤褐色。くちばし、足は赤色。翼の初列風切に大きな白斑があり飛ぶと目立つ。

インド、スリランカ、インドシナ半島、中国、朝鮮半島、スマトラ、ボルネオなどで繁殖し、北の地方のものは冬、南に移る。

日本にはごくまれな旅鳥。全国的に記録はあるが、長崎県対島佐護には春の渡りに少数渡来する。

北海道には1964年鹿追町然別湖、1965年鹿追町東雲湖、1971年９月28日利尻島沓形、1985年５月14日天売島、1986年室蘭（前記）、1987年５月29日小平町鬼鹿で記録された。

ヤマショウビン　1986・5・10　室蘭市　本多　進　撮影

11. コホオアカ（ホオジロ科）

1987年５月４日、北海道野鳥愛護会会員佐藤幸典氏は、連休を利用して天売島でバードウォッチングをしていた。島の外周道路沿いには北に帰るカシラダカが多く見られた、この道路から丘陵地林内小路を１kmぐらい入ると、道路沿い地上にカシラダカの群れが、枯れた雑草の実をついばんでいた、この中にカシラダカに似ているが異る種がいるのに気がつき、写真に撮ると飛ばれてしまった。あとでできあがったスライドを見て、コホオアカとわかったもの。

コホオアカは全長約12.5cm、日本で見られるホオジロの仲間では一番小さい。♂は頭央線、眉斑、ほおは赤褐色がある。頭側線とほおの周囲は黒褐色。アイリングは白色。上面は灰褐色で黒色の縦斑がある。下面は汚白色で、黒褐色の縦斑がある。♀は♂に似るが眉斑は白で、頭側線はない。

ユーラシア大陸北部で繁殖し、中国東部、インドシナ半島、ネパールなどで越冬する。

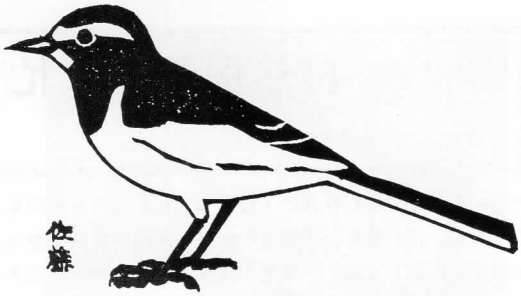
日本には数少ない旅鳥または冬鳥として渡来し、沖縄や九州では冬に、対島や舳倉島などの日本海側の島では、春秋渡りのときに見られる。

コホオアカ　1987・5・4　羽幌町天売　佐藤 幸典　撮影

北海道では1960年アメリカの学者リプレイ氏が、阿寒湖の原生林で♂を観察？。1977年９月根室市風蓮湖、1987年天売（前記）、最近では1989年10月21日、苫小牧で鳥類標識調査のとき記録された。

＜参考文献＞

日本産鳥類図鑑（東海大学出版会）、鳥630図鑑（日本鳥類保護連盟）、日本鳥類大図鑑（清棲保之）、北海道の野鳥（北海道新聞社編）、北海道新聞、朝日新聞報道記事等参照。



〒003　札幌市白石区栄通16丁目４－13

エトピリカ

星子廉彰

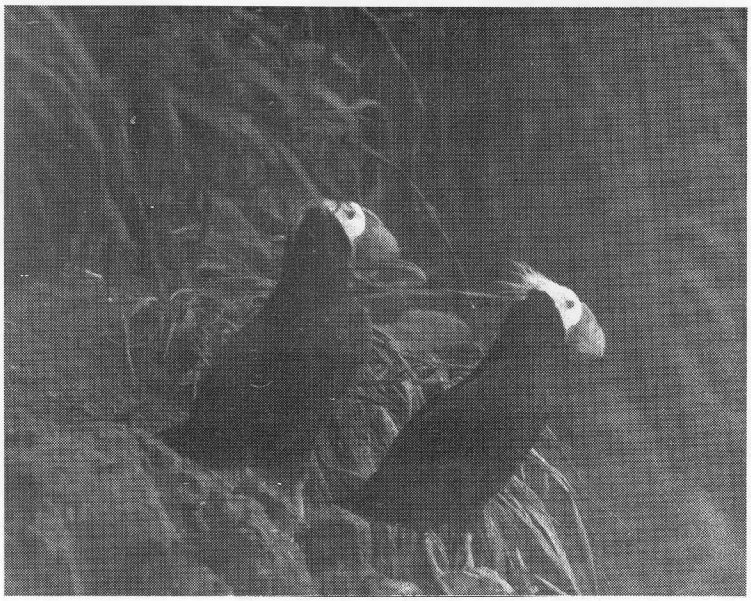
エトピリカはアイヌ語でエト（くちばし）、ピリカ（美しい）との意味で、道東の一部に繁殖地が限られている。全長39cmで夏羽は美しい。海岸・岩場の崖で繁殖している。繁殖期には餌をはこんでくる親鳥をオオセグロカモメが待ちかまえている。また沖の刺網にかかって命を落すものもあり、北米あたりでは、多くの生物が命を失っているとの報告もある。

＊　＊　＊

親鳥は餌をくわえて、小さい翼を精一杯はばたいて一直線に巣穴に突き込んでいく場合もあるし、タイミングが悪いと、巣穴の下に餌をくわえて、なんとか穴に入ろうとして隙をうかがい、遂にはあきらめて沖にさるものもいる。

エトピリカ岩では、ついに１番しか今年は繁殖していなかった。

神様のいたずらで、できそこなった美しい大きなクチバシの〝エトピリカ〟または〝神様のすばらしい贈り物〟絶滅寸前のエトピリカとカモメの悪い関係を絶ってやりたいと毎日痛切に感じた。



エトピリカ　89年７月17日撮影　エトピリカ岩

外国では、分布としてベーリング海周辺・カナダ南部・アラスカ南部・千島列島などで繁殖しており、冬季はパーシックフライウエイトで、カリフォルニアの北上部の海岸地帯等でも過しているようだ。

なお、エトピリカ岩近くの草原で、夏季はいない筈のゴマフスズメらしいのが１羽いた。いまも毎日図鑑をながめながら、現場の状況をふりかえっているが、カメラ不調で収められず確証が得られず残念に思っている。

真夏は繁殖期であるが、海岸地帯は濃霧の多い季節で育雛が大変である。特に巣穴の前で横着にすごしているカモメを見ると腹立たしくなるが、これも自然界・食物連鎖関係として眺めるには、余りむごい感じがする。

一卵しか産卵しないので、減少著しく、やがては道東から消えるのではないだろうか。

〒061－02　石狩郡当別町字東小川通104

自然保護係は忙しいが……楽しい

隅　田　重　義

こゝに掲載された写真は、最近５～６年このかたのものである。この数年、「野鳥の保護」届出が実に多かったので……記してみた。環境・気象・保護の面で考えさせられたので……また今後の課題ともしたい。

写真を語る。

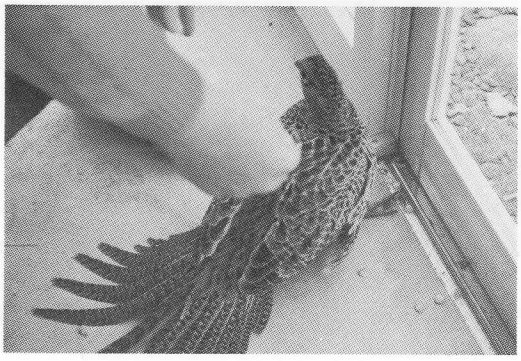
1　次々と運ばれてきた……野鳥である。立会いのうえで検討する。元気なもの……弱っているもの……傷ついているもの……と多様である。

2　女子職員も応援しての……栄養補給。野性は強い。自然保護係の窓から大空へ……保護・手当の甲斐あって。

3　街のどまん中へ……減少しているコウライキジのメス、人家の前庭に。おびえているのを保護（この家の主人ともに、大へん野鳥が大好きという）。市街地から離れた保護区へ放す。コウライキジの殖えること願って。とても元気だった。

4　コハクチョウ……１羽。もう大かた渡り去った頃である。函館市街を流れる亀田川で……餌をあさっているのを、近くの住民が通報してくれた。早速調査へ。珍らしいので子どもたちが石を投げる。大人も集まる。話題となり、道新に愛鳥家から電話。よく調査すると片羽が傷んでいる。全く飛べない。夕暮れまで観察したが捕獲のすべはない。自然保護係で対策する。

新聞報道のお陰か……誰れも追いかけるようなことは無くなった。羽の治るまで、そのままにしてはどうかと。



自然の力は大きい。１年後に大空へ……しかし只１羽……しばらく、その姿を眺めいった。こうした経験ははじめての事だが……１年間、保護には大変であった。

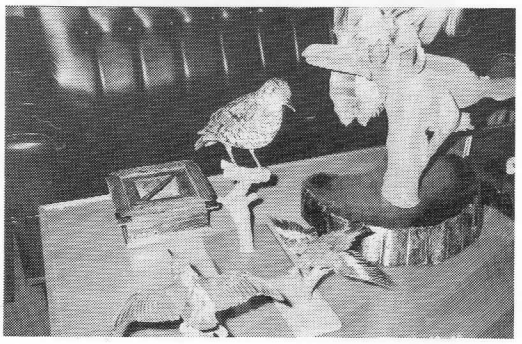
厚沢部町で電線に引っかかり、羽を傷めたのが１羽。また有斗高校の中庭で保護されたのが１羽。ちよう度、「渡りの頃」……自然保護係・ＮＨＫ・大沼管理事務所長さん等と大沼に放鳥。これは渡りの季節に合せてのことであったので都合よく、このコハクチョウ珍らしいことに30羽の仲間のところへ……。その後出掛けてみたが姿なく渡ったのであろう。安心した。これもみな……人の保護・愛育のおかげである。

5　大沼のコブハクチョウ……生まれたら沼へ。親と共に……全く驚いた。オスは警戒中、親の向うには巣が見える。これまで何度と調査・観察にきたが、自然の摂理に感じた。餌の藻を与えると争うように喰べる。生まれて、泳いで……すぐである。友人と、巣づくりから……

抱卵……育雛と。8ミリでも撮り続けたが、本当に楽しかった。人工の加わらない、この国立公園大沼は実にすばらしい環境である。自然を保護し、野鳥を保護する。やはり「人の力」である。最大の感激……親子揃ってのこのひと休み……よく育ったと思う。

6　珍鳥……サンカノゴイ　本道では、かつて絶滅と言われてきた。網走の自然保護員が発見して以来である。八雲の自然保護員掛川さんからの知らせで出かける。まさしくサンカノゴイ……函館公園で鳥類飼育中……死んだので、許可を得て、剝製（はくせい）にし、教材として本市に保管している。

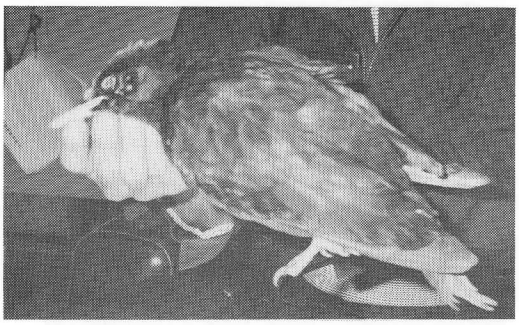
7．8　自然保護係……では今日まで、死んだ野鳥を剝製に……狩猟講習会教材……している。今では100点に余る見事な剝製が陳列されてある。しかし何といっても……実物にまさる教材はない。日本で最小のキクイタダキを始めとして……最大のオジロワシ・オオワシに至るまで剝製がある。道南は、渡りの要地であり種類も実に多い。恵山沖で漂流中のオオワシ、既に死んでいたのを漁師が届けてくれたので、許可を待って剝製。またコクガン（死亡のもの）も同様剝製にしてある。



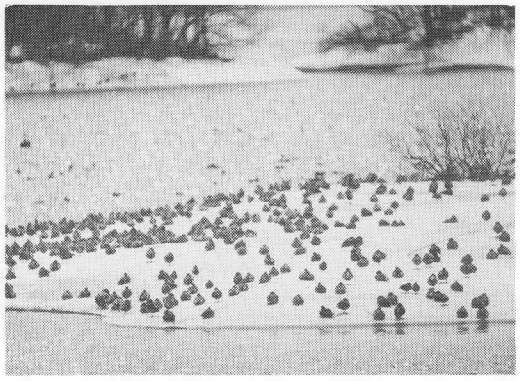
9　オオワシ・オジロワシ……毎年大沼に飛来する。年々数もふえている。今年は80羽以上記録されている。南茅部町役場にある老鳥オジロワシの剝製は全道唯一のものではなかろうか。

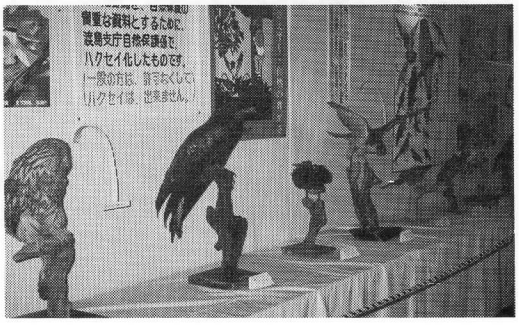
10　クマゲラの幼鳥……余り早く親から離れたのであろう。カラスにでも襲われたのであろうか、傷ついていた。手当の甲斐なく死亡した。一人前になるということは大へんなことである。

11　クマゲラ……長万部二股温泉附近で保護されたクマゲラである。幼鳥であった。附近を調査したが、太い営巣するような樹は見つからなかった。温泉の方は放鳥したという。



12　4月4日……この頃、大沼は渡り鳥の大群が羽を休める。何万という数。それに5～6日で北へ。この時期はもっとも調査によいが誰れも来ていない。この大群を毎年見ては〝渡り鳥健在なり〟と感じた。

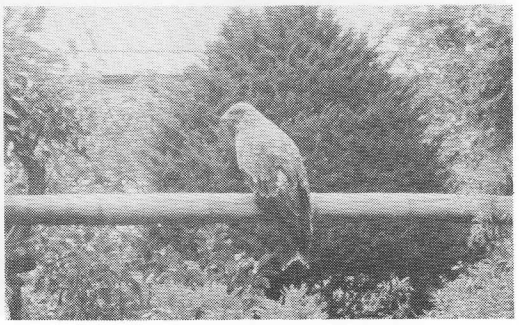




13～14　道南の渡り鳥……分布図を作成して一般市民にお見せする。大変有益であった。（会場は市内のデパート）。大変反響を呼んで喜んだ。数年前に朝日新聞社より依頼され「道南の野鳥」を連載したことがあった。

15　野生を失ったトビ……函館山の麓の或る人の別荘の留守番の夫婦が、買物に行って帰宅すると襲うというので、調査に出かけた。留守番の人はタカだという。用心して別荘に入ると、物干竿にいる……トビである。

老夫婦に事情をきくと、一日中ここに居て、買物の帰りに襲うので危険だという。「餌を与えますか」と尋ねると、時々「喰べ残り」を与えていたという。〝これからは一切やってはいけません。買物の時間には私たちが来ますから〟……と約束した。家へ入ると、また物干竿に戻る。2・3日続けたらもう来なくなった。野生を失っていた。然しこれは、誰かが飼っていて餌を与えていたようだ。それが逃げたのだろう。



16　その後のトビ……学校帰りの子どものカバンを襲う。主婦たちの買物籠を襲う……というので行ってみると、近くの人家の物干（2階）に、毎晩泊っていたと見え糞で白くなっていた。絶対餌をやらないように話をして帰った。しかし、こん度は前方の住宅地へと移った。

買物帰りの主婦の籠を狙って急下降で襲うという……支庁・警察と市で緊急対応の上駆除した。その後姿を見せなくなったと喜んでいた。野生は野生の……自然へ。飼いならしてはならない。どこでも、このような事件に出会っていると聞いている。

むすび

写真では意を尽し得なかったが、最近キツネの問題にしても、過ぎると人間が困ることになる。自然との調和は困難というよりも、よく事実を確かめると自明である。

自然保護係のコハクチョウ対策にしても、クマゲラの保護にしても……事実をよく究明して後に……はじめて真の保護が生まれるということである。

5・6年この方……環境の変化・気象の変化・保護の在り方について、種々の研究と問題とが生れている。私は、これまでに何度か、風蓮湖にシギ調査・渡り鳥調査に、網走濤沸湖と、北に東に南と出かけているが、広い北海道には、これから種々の問題が生れてくると思う。

みんなの力と、研究と協力とで……いよいよ明るい前進をしたいものである。（追　記）クマゲラ（13年間）・コクガン（10年間）継続調査して来たが、今年も特に渡りについて考えさせられた。今後みなさんと共に、一層努力して貴重な資料としたい。

〒040　函館市八幡町13～16

多摩川河口・東京港野鳥公園探鳥記

佐　藤　　勇

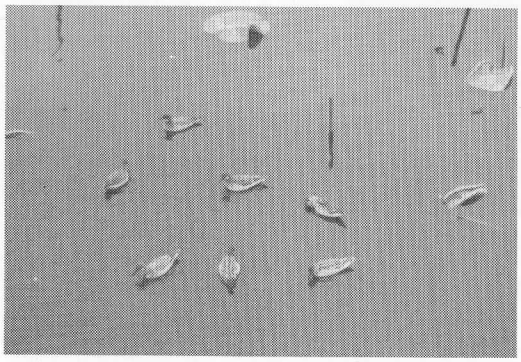
大倉山の探鳥……5月11日

5月10日午後羽田空港着。東横線大倉山の息子宅泊。翌11日4時50分起床．早速裏の大倉山探鳥を開始。登山口に行くと〝チョットコイ・チョットコイ〟と草藪の中で鳥が鳴く。姿も見えず、名前も判らず一寸失望していると、近くでキジバトがドバトと一緒に餌を拾っているのには驚いた。余り収穫はなかった。

多摩川河口探鳥……5月12日

横浜より川崎行きに乗り下車。京浜急行大師線に乗車終点の小島新田駅で下車。空にはコシアカツバメが数羽。徒歩で10分目的地に着く。堤防から河面を観察。アジサシがダイビングして魚をとっている。中州には鵜が羽を広げ、近くにコサギ・チュウサギ・ダイサギ・アオサギが次つぎと飛来。ムナグロをはじめ多くのシギ・チドリが徐々に集って来て餌を取っている。

東京港野鳥公園……車で30分野鳥公園に着く。高い塀の中が観察広場になっている。野鳥の生態が観察できるように数台の望遠鏡が備え付けてある。急いで望遠鏡にとりつく。樹の上で餌を食べるゴイサギが見える。水面

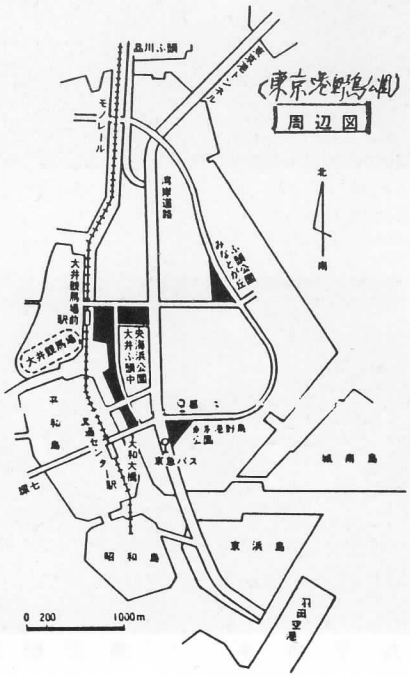


ではバンが子雛を連れスイーと泳いでいる。その周囲にいたオオバンが、枯草をくわえて水草の中に消えていった。巣造りの最中なのだろうか。その時小形の水鳥が数羽降下してきて着水。こうるさい程クルクルと回りながら餌を喰べている。よく観察すると体長20cm程で、顔が赤い。観察ブックを調べるとアカエリヒレアシシギだと確認した。道内では珍らしい野鳥をたくさん観察できました。会員の皆さんも、東京方面に出向いた節には、是非観察されることをお勧めいたします。

観察した鳥

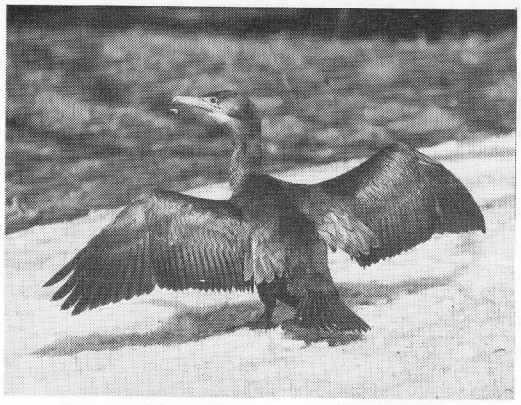
コアジサシ・コサギ・チュウシャクシギ・トウネン・メダイチドリ・ハマシギ・コガモ・カルガモ・ケアシシギ・ダイサギ・カモメ・チュウサギ・アオサギ・キンクロハジロ・ゴイサギ・オオバン・アカエリヒレアシシギ・ムナグロ・コシアカツバメ・バン

〒004　札幌市豊平区清田7条3丁目



誌上写真展

―― 平成元年度 ――



ヒ　メ　ウ　　難波茂雄

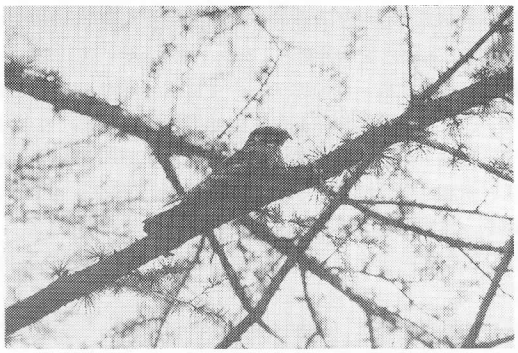
ミミカイツブリ　　山田良造

コウノトリ　　速水藤二郎

コウノトリ　　速水藤二郎

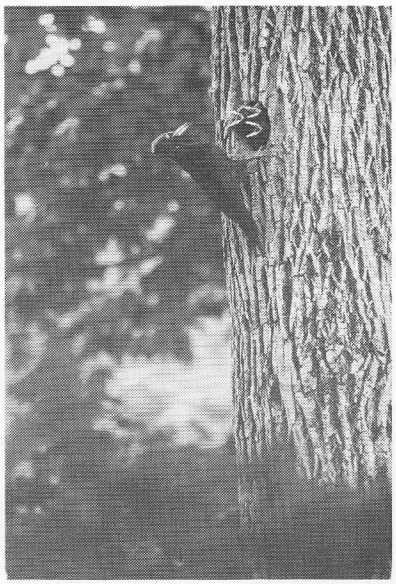
カリガネ　　渡辺俊夫

マガン　　和久雅男



ヨ　タ　カ　　村野紀雄

バ　　ン　　難波茂雄



クマゲラ　　山田良造

福移探鳥会

1．7．2　　野坂英三

私は、昨年の途中から参加したまだ初心者なので、鳥を見ても、とっさには名前が出て来なく、声もほとんど判別できません。それで、探鳥会の時には、幹事さんやベテランの人にくっついて歩いています。

以前は、街の中で、鳥の声がしても、まったく気にしていなかったのですが、探鳥会に参加するようになってから、鳥の声が気になるようになり、声がすると、すぐそちらに顔を向けるようになりました。

ヒヨドリやカワラヒワが、街の中にこんなに多くいるとは、今まで知らないでいました。今は、探鳥会の参加が楽しみになっています。

さて、福移探鳥会の日。朝のバスの中は、探鳥会に行く人が、たくさん乗っていて、今日の探鳥会は、盛況になりそうな感じがします。

福移につくと、早速、トビ、ヒバリ、ショウドウツバメ等が、飛びまわり、道先案内をしてくれます。

堤防に出て、藪に入る前にノビタキ等がいる為、足を止めて、双眼鏡をずらしながら見ていると、こちらに背中を見せている茶色っぽい鳥がいる。（はて、なんだろう？）しばらくすると、こちらを向き、のどの赤を、ちらりと見せた。と同時にまわりの２、３人からも声が上がる、「ノゴマだ！」。ほんのわずかな時間だったが、実は私にとって、ノゴマを見たのは、この時が始めてでした。

コチドリが、チョロ、チョロと歩いてエサをさがしている。コチドリにまわりの喚声は「かわいい」。ヒバリには「なんだ、ヒバリか」、ヒバリが冠羽を立てているのは怒っているのです。

ベニマシコがいたとの情報で、いそいで先に行って見ましたが、すでにいない。探鳥会では、この様な事が度々あります。先頭グループを歩くか、中間か、最後尾を歩くかで、運、不運が別れます。たとえば、今日の探鳥会の場合、ベニマシコを見た人は先頭グループ、ノゴマやコチドリを見れた人は、後の方のグループでした。

草原を、オオジュリンが見えがくれし、電線では、ショウドウツバメが盛んに交尾をしている。なんとも不安定なこと。だが、人間の感覚で考えてはいけない。

本日の探鳥会も無事終了、大変楽しい一日でした。

〔記録された鳥〕アオサギ、トビ、ウズラ、コチドリ、ウミネコ、キジバト、カッコウ、ヒバリ、ショウドウツバメ、ハクセキレイ、アカモズ、モズ、ノゴマ、ノビタキ、エゾセンニュウ、シマセンニュウ、コヨシキリ、オオヨシキリ、シジュウガラ、ホオアカ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、ベニマシコ、スズメ、コムクドリ、ムクドリ、ハシボソガラス、ドバト、以上29種

〔参加者〕森岡弘光、山田れい子、野坂英二、大沼　裕・陽子、勝見真知子・真紀子、原口文子、柳館ヤスチ、大町欽子、吉岡孝夫・美津子・直也、難波茂雄、志田博明・政子、水上太郎、三船幸子、中矢道恵、千葉　広、新田キノ、佐藤恒彦、戸津高保・以知子、松井　昌、佐瀬恭子、高橋　洋、菅原哲夫、竹内　強、横田通典、遠藤静江、伊藤　盛、蛭田悦子、佐藤喜美、山田甚一、佐々木允子、五十嵐優幸、田中志司子、原口佳記、桝川　保・弘子、鎌田玲子、泉　勝統、香川　稔、大西典子、長嶋匠・かよ子、田島和恵、山田義隆・紀栄子・健一。（姓のみ記名の方　斉藤、松本、杉島の３氏）以上54名

〔担当幹事〕戸津高保、泉　勝統

〒001　札幌市北区北32条西３丁目　芳名ＭＳ

鵡川探鳥会にて　(1)

1．8．27　　田　中　志司子

新聞を見て、始めて鵡川へシギ、チドリに会いに行くことにした。シギ、チドリは見わけが難しいとは聞いていたので、始めての場合は他の人には見えても、私には見えないのではないかと覚悟はしていた。なぜって生まれて始めて探鳥会に行った時だって、私の目にはさっぱり見えなかったのだから、あのヒヨドリでさえ……。

牧場の中に入る。牛の糞がところかまわず落ちている中を、リーダーの後をついて歩く。プロミナを覗いてピントを合せている人に「何かいますか」「ヒバリシギが入っているよ、どうぞ」間髪を入れず覗く。いたいた、なんといってもまずはシギに会えたのだ。〝感激〟。

でも私がはっきり見えたのは、このシギたった１羽。対岸に何かいるらしい。プロミナにしがみつく。何か動いている「何ですか」「メダイチドリ」私の目にはよく解らない。すぐハンドブックのページをさがす。こんなかわいらしい鳥なのに、でも実物は見えないのだから仕方がない。そんなことの繰返しで前へ進む。河口に出たと思ったら、何と海と並行に溝がある。なんで？よく見ると掘り返したらしい形跡がある。旧鵡川の河口が海岸線の変化。そのために生活用水の排水路を掘り、排土で干潟を埋めたのだった。始めて来た鵡川でこんなことが始まっていたのだ。だんだん鳥が来なくなるのかなあー。

宮島沼にしろ鵡川にしろ将来のことは考えず現在生活している人々の利益だけを考えなければならないのかなあー。でもきっとそのツケが廻ってくることを漠然と思う。一刻も早く共存の方法を見いださなければ。

解散後、札幌まで乗せていただくことになった車の中で、原稿用紙を渡され、はたと困った。なんと私は「ヒバリシギ」一羽しか見ていないのだ、アラどうしょう、いつもこうなんだ、後から困るんだから、失敗に気づくまでに時間がかかる。

帰りに森田遊園に寄った。そこで素敵なことに出会った。〝あのカワセミに会えたのだ〟。肉眼で見える巣立って間もない雛３羽（本当は６羽いるらしい）親鳥から餌をもらっている。ホバリングをして沼の中へダイビング、その目の真剣なこと、アッ失敗、残念、今度は成功と時を忘れた。

あの美しいコントラスト、精悍な顔、素早い動作、声もまたいい。アー目イッパイ、耳イッパイ、腹だけは……困った原稿のことなど全部忘れていた。

〒062　札幌市豊平区豊平６条10丁目２－136

〔記録された鳥〕アオサギ、トビ、チゴハヤブサ、ムナグロ、コチドリ、シロチドリ、メダイチドリ、アオアシシギ、タカブシギ、ヒバリシギ、ウミネコ、セグロカモメ、オオセグロカモメ、シロカモメ、ユリカモメ、ヒバリ、ショウドウツバメ、ツバメ、ハクセキレイ、カワラヒワ、ムクドリ、ハシボソガラス、以上22種

〔参加者〕澁谷信六・弘子、佐藤彰夫・未利子、中尾都、高橋典彦、広部八十吉、羽田恭子、今野　弘、渡辺勘治、山田良造、新田キノ、佐々木和枝、柳沢信雄、桝川　保・弘子、福岡研也、佐川節子、竹内　強、小堀煌治、大西典子、富川　徹、源通光夫、難波茂雄、高橋洋、石谷義一、佐藤　勇、山田甚一・れい子、矢野昭二・玲子、泉　勝統、佐々木友子、鎌田玲子、西　　諭・早百合、野坂英三、大西裕子、佐々木憲一、関口健一、香川　稔、山田紀栄子・健一、佐々木武己、木内泰夫・道子、田中志司子、丸山　薫・かおり、永島良郎・トキ、道川冨美子、志田博明、三船喜克・幸子、遠藤　茂・幸子、大野信明、松本輝雄、斉藤、井上公雄　以上63名

〔担当幹事〕富川　徹、大野信明

鵡川探鳥会　(2)

1. 9. 10　　鷲田善幸

久しぶりに愛護会の探鳥会に参加。始め少し雨が降ったがすぐにやんだ。

畑の水たまりにコチドリ、ニュウナイスズメ、ムクドリが集まっている。牧場の２つ目の柵を越えた所で、東側の湿地にヒバリシギ、タシギ、タカブシギが出現し、じっくりと見る。ムナグロ20羽位上空を飛んでいるが降りてくれない。

川岸にイソシギ、そして対岸にはアオアシシギ２羽が忙しそうに歩き回っている。ノスリが飛来。カワセミが川を横切り騒いでいると川岸にもう１羽。岸にいたカワセミが小魚をくわえる姿に感激の声があがる。河口にはオオセグロカモメ、ウミネコの群れが浮かんでいる。

例年、シギ・チが着く所に生活排水路が海岸に平行に掘られ、干潟がなくなっている。海岸近くの湿地も乾燥してしまい、昼食中、シギ・チが全然現れない。

柳沢信雄氏が、排水路工事について鵡川町に聞いた様子を報告。町長に干潟を守るように手紙やハガキを出そうと提案される。

鳥合せ中に３羽のカモが飛んだのを羽田さんがホシハジロと確認。帰り、先ほどの湿地でタシギを再びじっくり観察。

10年前、鵡川探鳥会に参加し、羽田さん、梅木氏、亡き萩さんをはじめ愛護会の方々にシギ・チを教えていただいた。当時は、ハマシギ、トウネン、ムナグロ、ダイゼンなどの群れがよく見られ、ツバメチドリのような珍鳥もしばしば現れた。周辺の環境がどんどん悪化していく中で、せめて鵡川の干潟をシギ・チの中継地として維持していきたいものと思う。

〒053　苫小牧市しらかば町３丁目１の28　２－201

〔記録された鳥〕カイツブリ、アオサギ、トビ、チュウヒ、コガモ、ホシハジロ、ムナグロ、コチドリ、アオアシシギ、タカブシギ、イソシギ、オオジシギ、タシギ、ヒバリシギ、ショウドウツバメ、ハクセキレイ、モズ、ノビタキ、カワラヒワ、ニュウナイスズメ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、カワセミ　以上24種

コ　チ　ド　リ

〔参加者〕田中志司子、丸山　薫・かおり、三浦美重子、羽田恭子、桝川　保・弘子、清水朋子、森田新一郎、柳沢信雄・千代子、戸津高保・以知子、田中金作・礼子、山田良造、鷲田善幸、志田博明、小堀煌治、鈴木克司、松本輝雄・定子、成澤里美、竹内　強、武沢和義・佐知子、河野利恒・千枝子、木内泰夫・道子、泉　勝統、吉岡孝夫、井上公雄　以上33名

〔担当幹事〕山田良造、竹内　強

［野幌森林公園］
平成２年２月11日(日)

北海道で最も寒さの厳しいこの季節、野幌ではカラ類やキツツキ類などの留鳥や、マヒワ、ウソ、ツグミ、アトリなどの冬鳥が逞しく生活しています。探鳥会は雪の上を歩くスキーでゆっくりのんびり行いますので、きっと彼らの生活の一面をのぞくことができるでしょう。さらに、森のなかの雪上に描かれたトレースともいうべき、キツネとウサギが追い・かけっこをした足跡が観察できるなど、アニマル・トラッキングも楽しめます。

午前９時　大沢駐車場入口集合

［円山公園］平成２年３月４日(日)

都会人の憩いの森円山公園で、身近な鳥たちの姿を見ることができます。この時季は日一日とうららかな春の陽ざしを感じとれる頃となり、雪質も硬雪に移行しつつ、長靴でも十分歩けます。残念ながら昨年より管理事務所の餌台の鳥は望めませんが、気を付けて森のなかを散策すれば、アトリ、ウソ、キレンジャク、カラ類、キツツキ類などは見られます。都会の公園にいながら、ちょっぴり都会の喧騒を忘れさせてくれることでしょう。

午前10時　円山公園管理事務所集合、午前中解散

［ウトナイ湖］平成２年３月25日(日)

探鳥会を始めて28回目をむかえます。春は鳥たちの大移動（北帰途中）の季節であり、ウトナイ湖には毎年たくさんの鳥たちが立ち寄っていきます。昨年は天然記念物のヒシクイ、オジロワシ、オオワシをはじめ、オオハクチョウ、ヒドリガモ、オナガガモなど多くのカモ類を観察できました。ここはバードサンクチュアリーですので珍しい鳥も時折みられます。特にこれから探鳥を始めたいという方には、ウトナイの醍醐味を満喫していただけるものと思います。

午前10時　ウトナイレイクホテル湖畔側集合
(行)道南バス　千歳空港発苫小牧行　９：10
(帰)　〃　　ウトナイ遊園地発行　14：18、15：08

［野幌森林公園］平成２年４月15日(日)・22日(日)

雪が触けた辺りから可憐なフクジュソウ、エゾエンゴサクなどが花を咲かせ、春一番です。鳥たちもカラ類やキツツキ類などの留鳥を中心として次第に活発な動きを見せはじめます。また同時に、南からやってくる夏鳥と北へ帰る冬鳥の“交替の季節”ともいえ、何かドラマチックな気分に浸されることでしょう。まもなく訪れるバードソング（囀り）のシーズンを前に、足慣らしをしてみてはいかがでしょうか。

午前９時　大沢駐車場入口集合

［野幌森林公園を歩きましょう］平成２年４月８日(日)

午前９時　大沢駐車場入口集合

※いずれの探鳥会も余程の悪天候でない限り行います。
昼食・筆記具・観察用具・雨具等をご用意下さい。
探鳥会の問合せは　011(551)6321　井上まで。

◆新年懇談会の開催

恒例の新年懇談会を次のとおり開催いたします。皆さん誘い合せのうえ、多数の方々が参加されますようお待ちしております。

日　時　　平成２年１月13日(土)午後２時から
場　所　　札幌市婦人文化センター
　　（札幌市中央区大通西19丁目）

内　容

・講演……鳥類標識調査や愛鳥教育活動などで、ご活躍の三浦二郎氏に「北の鳥と南の鳥」と題してスライドをまじえてのお話をしていただきます。
・スライド映写……みなさん方の持ち寄ったスライドを映写します。たくさんの方々の作品をお待ちしております。　　会費……500円

◆写真展の作品のご用意を

平成２年も野鳥写真展の開催を予定しております。みなさんの自信作の準備をお願いします。応募要領は下記の通りです。なお、営巣中の写真など、マナーに反すると思われるものは、ご遠慮ください。
また、写真以外の絵画・版画なども対象からはずさせていただきます。

〔募集要領〕

・大きさは四ツ切りとしカラー、白黒は問いません。
・提出写真の鳥の種名・撮影年月日・撮影場所及び撮影者氏名を記載願います。
・締切日　平成２年４月15日(土)
・送付先　〒064 札幌市中央区南６条西11丁目
　共済ハウス内　井上公雄宛
　（電話　011－551－6321）

〔北海道野鳥愛護会〕年会費 1,500円 （会計年度４月より）　郵便振替 小樽 １－18287
〒060　札幌市中央区北３条西11丁目 加森ビル５・６階 北海道自然保護協会気付 ☎(011) 251－5465